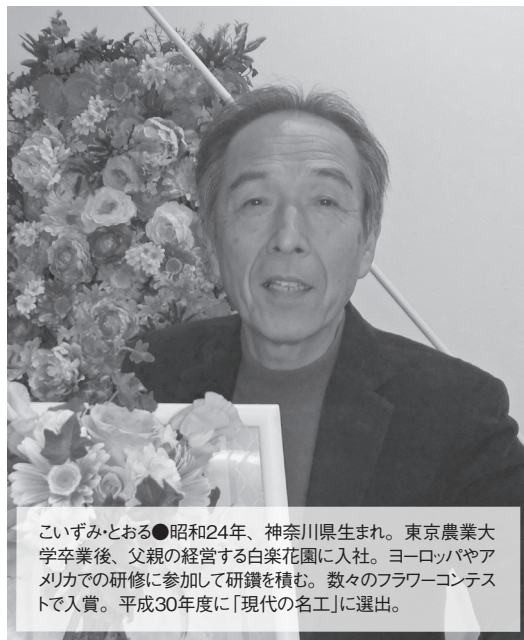


“技能”の裏づけとなるのは “経験”の積み重ね

フラワー装飾技能士
小泉 徹さん

株式会社白楽花園 代表取締役

小泉さんは、父親の経営する生花店を発展拡大させ、現在横浜を中心に8店舗を構え、フラワー装飾技能士として、社団法人日本生花通信配達協会（現一般社団法人JFTD）のコンテストで内閣総理大臣賞を受賞するなど大活躍しています。また後進の指導にも熱心にあたっています。



こいずみ・とおる ●昭和24年、神奈川県生まれ。東京農業大学卒業後、父親の経営する白楽花園に入社。ヨーロッパやアメリカでの研修に参加して研鑽を積む。数々のフラワーコンテストで入賞。平成30年度に「現代の名工」に選出。

幼少時から父の仕事を手伝い この道へ

——お仕事を継がれた経緯を教えてください。

小泉 私は幼少時から父の仕事を手伝っており、自然と草花に親しんできました。父からは言われませんでした。が、やはり家業を継ごうと思いい東京農業大学へ進学し、草花について勉強しました。

大学時代に、フラワー装飾というジャンルに出会いました。そのジャンルを切り開いたのは、日本初のフラワーデザインスクールである東京フラワーデザイン研究会初代会長の大石寛氏です。私をはじめフラワーデザ

イナーの多くは、大石氏に学んでいます。

——大学卒業後、本格的にフラワー装飾のお仕事をスタートされますが、その後ヨーロッパへ研修に行かれていましたね。

小泉 ヨーロッパ研修では非常に衝撃を受けました。日本では生け花を「観覧」になってわかるとおり、点線は「線」という概念で生花を形づけていきます。しかしヨーロッパでは花束に代表されるように「塊」という概念で生花を形づけていくということが強く印象に残ったのです。

そのことが、私の後々の仕事に大きく影響していきます。

花と対話し 花の個性を引き出す

——平成11年度、横浜市のマイスターに「花^か装飾」で選出されていますが、花^か装飾とはフラワー装飾と同じでしょうか。

小泉 ほぼ同じですね。花^か装飾とは花と草を意味します。観賞用の花をもつ植物全般をいいます。具体的には3種類「花^{はな}物・葉物・実^{はな}物」ですね。それらの植物の色や形や特性を生かして、小さな花束から、ウェディングブーケ、

デパートのディスプレイなど、用途やサイズが多岐にわたるものをつくり、アレンジするのが私たちの仕事です。

——一代で8店舗を出店するなど事業を拡大されたそうですね。

小泉 実は、私から営業したわけではなく、展覧会で大賞を受賞してから次々に出店依頼が舞い込みました。大きなデパートや商業施設から「うちにも出店してくれ」「うちにも」と。バブルの時代はよかったです（笑）。

もちろん、自分の技能が社会に認められたということは素直にうれしかったですね。

——壁面への生花装飾について教えてください。

小泉 誰も挑戦していないことに取り組もうと思いました。生花は造花と違い水分を必要とするため、壁面等の垂直な面での装飾はほとんど不可能でした。しかし防水性と保水性を備えた壁掛け用具を考案したことにより成功したのです。

もちろん、この装置はまだ改良の余地があります。内部には花留め用の吸水性スポンジが装填されています。これを覆うプラスチックによって、植物からの水分の蒸散を防ぎ、水分が減った場合はスポイトなどを使って給



壁面への生花装飾



フラワーデザイン写真集「花白楽」

水することができます。

——本も出版されていますね。

小泉 ええ。フラワーデザイン写真集「花白楽」など、数冊発行しました。当時はデジタルカメラではなかったもので、自分で現像したことなど、よい思い出です。

——お仕事の中ではどのようなところに「苦労なさいますか」。

小泉 生花は「生もの」です。完成させるための時間も少なく、また熱に弱いのでどうしても作業場を低温にしなければなりませんし、当然輸送も低温を保たなければなりません。ですから、体調管理には気をつけてきました。

またこの世界でもそうだと思いますが、納期に気をつけることですね。例えば、企業の新事務所オープニングパーティをはじめ、結婚式・葬式などの冠婚葬祭には、花が欠かせません。それに間に合わせるよう家族・従業員総出で徹夜というのも当たり前でした。皆の協力なしにはできない仕事です。

——ご子息も後を継がれて、全日本花弁装飾技術選抜選手権で優勝されて内閣総理大臣賞も受賞されましたね。

小泉 私から言ったことはないのです

が、同じ道に進みました。大学在学中にはかの先生に師事し、自分で道を切り開いてくれました。当社でチーフデザイナーとしてデザイン全般を担当し、商品開発やイベントプロモーション、全国各地でフラワーデザインのデモンストレーションや講習会、また花専門誌に作品を掲載したりもしています。

——フラワー装飾というお仕事のどんなところにやりがいを感じていらっしゃいますか。

小泉 植物の持ち味を生かし、花の種類と色の取り合わせに独創性をもたせるのが腕の見せどころです。1本1本の花の特性を見極め、切り口や水揚げの方法を工夫します。そして花と対話しながら、花の個性を最大限に引き出したときが喜びとなりますね。

——技能の継承についてはどのようにお考えですか。

小泉 今、全国各地で開催される団体の技能講習会で、後進の技能向上と育成に励んでいます。また、全国から生花店の後継者を預かって、色彩感覚・創造性・独創性・デザイン感覚が養えるよう指導しています。

私は技能について裏づけとなるのが経験の積み重ねだと思っています。ですから、若い人には「まず経験を積み

なさい」と言っています。経験を積み重ね、ということを理解してもらってこそ、技能の継承につながると思います。

また当たり前ですが、基礎があつてこそです。ときには、自分のイメージに合う花や木を求めて、産地に自分で探しに行くこともあります。そのとき大学時代徹底的に草木について学んだことが、非常に役に立っています。

——フラワー装飾について一言お願いします。

小泉 植物は生き物です。人間と同じです。ですから1+1=2ではありません。後進の指導の際には必ず「フラワー装飾の世界は1+1は2ではない。∞(無限大)だから」と言っています。

